

# イスラームと学校・教育

## テーマの趣旨

佐久間孝正

20世紀後半のソ連・東欧を中心とした社会主義圏の崩壊により、グローバリゼーションの動きはますます強化されつつあるが、同時に見逃せないのは、かつてのイデオロギーに代わって文化による摩擦が激化していることである。グローバリゼーションが、インターナショナル化やアメリカナイゼーションとどう異なるかに関しては議論のあるところだが、アメリカナイゼーションをその深部に含んでいることは事実である。それだけに、アメリカ的な人権や民主主義と理念を異にするイスラーム諸国の反発は大きい。

こうなるとこの異質な宗教、文化とどう共存するかは、現代の喫緊の課題である。イスラーム教徒は、宗教離れの著しいこんにちにおいても一貫して増えつづけ、世界人口の五分の一を占めており、日本も回族のいる中国、ミンダナオ島のフィリピン、インドネシア、バングラデシュ等世界でも有数のイスラーム諸地域に隣接している。すでに日本には、モスクが60以上あり、イスラーム諸国から入国した外国人労働者との結婚による日本女性のイスラーム化、すなわちムスリマも増えている。また保育園や小学校では、給食にハラール・ミールが導入されたり、その要求も起きている。

今回のシンポジウムでは、ひとあし早く200万人ものイスラーム系住民を抱え、教育界でも少数ながらイスラーム・スクールをGMSに認めるなど、独自の共生をはかろうとしているイギリスの事例を通して、今後、日本の教育界でも避けて通れない「イスラームと学校・教育」の問題を考えてみたい。

### ウォルフォード教授に対する事前の質問事項

- 1) 現在イスラームスクールは2校認可されているが、今後増える見通しはあるのか。
- 2) あるとすれば、どの学校が最有力か。
- 3) ないとすれば、2校が認められた時点で、これはイギリス政府がイスラームを差別していないための方便として2校を指定しただけで、一種のみせかけに過ぎないといわれたがそれはどうなのか。

---

佐久間孝正 (さくま こうせい) 立教大学教授

- 4) 他面、今後増えるとするれば、教育界の一層の隔離化を心配する人がいるが、これはどう考えればよいのか。
- 5) イスラーム学校の GMS に刺激されて、シクやその他の民族学校の国費支給の動きも進んでいるのか。現にイスラームスクールが認可されたときユダヤの学校も 2 校認可され、ユダヤの認可校はかなり増えているが、イスラームに反発はないのか。
- 6) 多文化教育 (MCE) と反人種差別教育 (ARE) の教育運動は、今後どう展開すると思われるか。この運動は、土着のマイノリティともいえるトラベラーズやロマの教育にはどのような姿勢をもって対応しようとしているのか。
- 7) EU の動きが強化されるなかで、「下からの MCE」運動よりも「上からの MCE」運動の方が活発化していると思われるが、エスニック・マイノリティの人はこれをどう考えているのか。
- 8) 今年の 9 月からシティズンシップ教育が公的に導入され (すでに実践している学校もあるが)、テスト科目にも指定されるが、教科内容ははっきりしているのか、消費者教育から環境教育、人権教育等なんでもありの印象を受けるが、イギリスではどう受けとめられているのか。
- 9) 労働党になって、相次いで白書、緑書が公表され学校の再編が打ち出されたが、その進行具合、これはマイノリティ学校の一層の地盤沈下を惹起するのではないのか。
- 10) その他。